

てやりました。八か月で離乳食でしたので少しは助かりましたが、とう／＼足が立たなくなってしまうました。

お世話して下さいの方が一時列車を止めて、小さい子供のためにスープを煮て下さいました。

やっと少し元気を取り戻しました。当時の鉄峯の駅に一時停車したとき主人のお友達がいることをかね／＼聞いておりましたので、さがして頂きましたら飛んで来て下さいました。

「待っていなさい。食べるものを持って来ますから」と言つて、一面識もなかった私に、いろ／＼な物を持って来て下さいました。庭にできたトマトだと言つて沢山下さいました。用意してあった炒つたお米を缶に入れて下さった時、人の親切が体に伝わって来て胸が熱くなりました。

みんなの目の前で、買い溜めしておいた粉乳と思うものを飲ましていらつしやるお母さんと子供がおり、私の二男と同じような年齢の子供さんは丸々と肥つて、自分のお乳も吸わせていらつしやいました。

少しでも分けてほしいと思いましたがこの先どうなるかわからないのに、人にあたえるミルクなんか有りませんもの。よくわかつていながらうらめしく眺めていました。

この時初めて人の心の奥をわかせて頂きました。戦争のない平和な世の中、もつとお互いのことを思いやれる世の中にしたいいものです。

緑園

鳥取県 福永義久

昭和十七年三月、母姉と三人は父(元満州国宮内府)の在する特別市緑園住宅へと父の弟に連れられて行きました。この住宅は大きく、ベチカつきで廻りには畑、共同井戸、近くに学校食糧引替所等あり、住宅地をすこし出ると山の無い中国大地が広がり、開墾して野菜を作り野草を摘みと夕焼を見によく出かけたものです。冬の楽しみは玄關の外の廻りに夕方水を撒き朝ス

ケートをするのでした。又父の公休の時には、新京駅に出かけ勇壮な蒸気機関車を見て喜び、新京市内の知人宅に出かけては騒いだ。

昭和二十年夏が近づくにつれ、毎夜のように空襲警報があり、電灯に布をかけ、畑に出て声も出さず隠れる日々となった。住みなれた住宅を出る日がきた。手荷物には子供用リュックサック一つで、中に氷砂糖十個ほどで何も無い。出発だというのに、前の家の人が出て来ない、奥様の体調が悪いとのこと、母達と別れを告げた。

いよいよ新京の都を汽車で大栗子へと向かった。ここで子供の持っている物も取られてしまった。又汽車に乗せられ臨江駅へ、そして煙筒溝へと、ここで妹(次女)が生まれたが、食事のことかく状態の折り、母に出産時の糖が必要であろうと、知人が一にぎりくらいの砂糖、大根を一本くださった。母は一口食して子供に食べさせた、その時のおいしさは言葉で言えないもので忘れられない。

通化に移った。一家が入った所は、平家のレンガ造

りの長屋で何棟かあった。裏は小高い山で、近くに農家が一軒あり、山すそは畑が広がっていた。その農家の先に、浅い大きな川があり子供でも膝までで渡れた。

ここでの毎日は母の内職のマッチ箱作りを手伝うことでした。姉も子供ながら物売りに廻った。まれに母に連れられて町に出た。店先に大きな饅頭が売られていて食べたかったが、買ってもらえない。胡麻が振りかけてあるのかとみればハエが山ほど集まっていた。

又町に出る道すがら兵士を見ると殺されるとコウリヤン畑へと隠れた。父の休みには町の風呂屋に背負われて出かけ道順をよく覚えていとほめられた。川へは一人遊びでよく出掛けた。近くの農家にも度々遊びに行ったが、大変可愛がってもらって何かともらった。或る日豚の大声がする。何かと見れば裏に大きな風呂ガマに湯をたぎらせ生きたまま前後足を縛り釜に入れた、しばらく豚はわめいた。子供心にかわいそうなことをすると思った。

また、ある日母に連れられて河原に行った、そこには男性(大人)が背を向けて横たわっていた。耳の横

に穴が空き頭の内物が抜かれていた。母は此の方は乗にするらしいと話してくれたが、長居は無用と帰り外に出ないようにとも言った。

毎日の主食といえば、麦の皮つき、コウリヤンの皮つきを煮た物で子供の消化器にたえ難い。弟は新京を出てから栄養失調により、帰らぬ人となった。二年五か月余の人生であった。山上を墓地としていた所に埋葬した。ここは山犬(狼)が多く、心配になり行つて見れば、弟や他の埋葬地が掘られていたので、火葬にして一握りの骨を布でつつんで持ち帰った。生れたばかりの妹は時が時だけに育たないと言われたが、医をつくして助かった。

母は中国の人が「女の子供を呉れ、男の子供はいらない」とのことだが断つたと話してくれた。今、日本に住んでいることができてほんとうに父母に対して感謝している。

いよいよ日本へ帰るとのこと、当日通化駅に集合した。列を組み、毎昼夜歩くことばかり、子供の足ではたいへんなもので、ただ父母の手にするのみ。ここ

まで来て置き去りにされてはたいへんと思ひ、黙々と歩いた。母は妹のために三尺四方の薄いフトンを出る時にもらい、それにくるんだ。途中取られかけたが、なんとか許してもらつた。

やつと汽車に乗ることができた。子供の私達は大いに喜んだ。がつかの間、貨車(石炭車)に移された。スシ詰めのため、直立に座っているのがやつとのこと、身動きができない。秋に入った中国はよく雨が降り、皆頭からズブ濡れである。妹はフトンで頭から包みこんだ、父母姉は濡れほうだいですることもできない。冷えて小便がしたいが、車中で出来ない。父は低速で走る汽車の連結器に降り、抱きかかえて用を済ませた。時には汽車は止まるが、下車して乗り損ねたら大変である。

奉天に着く、予防接種を受ける、又貨車に乗る。錦西に着き下車する。又貨車に乗り、コロ島へと向かう。特に子供は話すこともなく、雨に濡れ、廻りの景色を見るのみ。汽車は止まった。やつと乗船できた。船中は狭くスシ詰めである。おにぎりや梅ぼしが出たが、

船酔いして目が廻った。大人達も船酔いが多かった。船上での死者の方々の水葬は今も頭に残る。

聖なる日本佐世保に入港、上陸、身内の迎えも無く山陰方面行きの汽車へと乗りこんだ。

悲惨、満州の思い出

熊本県 奈須 竹子

主人は昭和十四年の春、熊本県庁の農業技手として勤務していましたが、大陸に憧れて満州国興農合作社職員に採用になって、昌図県の合作社に勤務しておりました。私は昭和十六年三月、縁あって結婚し満州に渡りましたが、その年の八月、四平街に転勤して、間もなく、チチハル野戦病院で三か月の衛生兵教育召集をうけて、十一月に帰宅しました。

私は、主人が教育召集をうけている時も、婦人会の呼び出しをうけて四平街駅で遺骨の出迎え見送りをしていた。列車の中に三段に作られた祭壇に白布に包ま

れた箱がぎつしり並べてあるのを拝見し、気の毒でならず、涙ながら白い菊の花を一本づつ差し上げていました。このことはノモンハンで亡くなられた軍人の尊い戦死とわかり驚きと悲しみを深くしました。

昭和十七年、撫順県公署に採用され、県農事試験所勤務となったので、場内に勤務していた満系職員とその家族と親しい交際ができました。

その頃、関東軍は南方に大移動などの噂を聞いていたが、昭和二十年三月に主人にも、撫順駅前に集合の召集令状がきました。朝五時、まだ薄暗いころ主人は霧の中へ去って行った後ろ姿は、とても悲しく忘れることはできません。覚悟はしておりましたものの、私は長男、次男と三人の生活が始まりました。

留守家族は励まし慰めあいながらも心細い毎日でした。国軍とか八路軍とか襲撃にくる等の話があつた頃でしたが、或日の夕方に空襲のサイレンが鳴り響き、驚きと緊張の中で柳行李に入れた次男を背負い、長男の手を引いて指定されてあつた防空壕に入りましたが、心細いこと限りありません。翌朝の連絡で又々、